

# 日本メキシコ学院におけるメキシココースとの交流授業の実践

前日本メキシコ学院 日本コース 教諭  
北海道帯広市立稲田小学校 教諭 越 智 卓

キーワード：交流授業，国際性，ペア交流，グループ交流，優位性

## 1. はじめに

「日本メキシコ学院」は、日本コースとメキシココースが併設されている世界でも珍しい国際校である。この学院においては、日本人学校の教員として児童生徒に教えることはもちろん、国際校として、メキシココースとの交流授業を行うことも重要視されている。ここに、自身が行った交流授業を中心に授業実践を紹介したい。

## 2. 研究主題の設定に向けて

### (1) 研究の経緯

日本メキシコ学院では、過去に文化交流を目的に両コース間で児童生徒の交流が行われてきた。多くの場合、「七夕」や「死者の日」といった両国の年中行事を軸とした交流であった。

年中行事を軸とした交流は、子どもたちに両国の文化の一端に触れさせる機会を与えることができる。その一方で、交流が一時的、単発的なものとなりやすく、子どもたちに「国際性」を育む意図的、計画的な交流にまでには至っていないという反省があった。

そこで、2011年度から「国際社会をたくましく生きる力の育成」を研究主題とし、子どもたち同士の継続的な関わりを大切にしたい学習展開を行うことを目標に系統立った交流授業の年間計画作成を行った。

### (2) 2013年度の研究主題

国際社会をたくましく生きる力の育成  
～子どもたち同士の継続的な関わりを大切にしたい学習展開を通して～

### (3) 研究主題の捉え方

2011年度からの研究において、児童および生徒に見られる共通の課題として「メキシココースの児童生徒とのコミュニケーションに対する抵抗感」が見られた。

授業において指導者を介しての意見交換の場は多くあったものの、児童生徒個人の間でコミュニケーションをとることが難しかったことや、コミュニケーションの場があったとしても意思の疎通が思うように行えなかったことがその原因として考えられる。

しかし、「他者理解」の分析では、どの学年でも肯定的な意識の向上が見られたことから、交流授業を継続し、コミュニケーションの機会を重ねることによって、抵抗感が減少していくと予想した。国際社会を生き抜くためには、目の前にある課題に真摯に取り組む姿勢が大切である。それには根気や持続力、忍耐力、責任感が必要である。保護者による学校評価においても、これらは児童生徒に身に付けさせたい資質であった。

また、本研究の軸であるメキシココースとの交流においては、継続的な人間関係によって言語や価値観の違いを乗り越え、学習課題を解決していくことが国際性を培う上で大切な経験だと考え、上記の研究主題をもとに、「他者との関係作りを大切にしながら、課題をあきらめずに最後までやりぬく資質」の向上を目指した。

#### (4) 研究方法

- ・ 小学部低学年，小学部高学年，中学部の3チームに分けて研究・実践を行う。
- ・ 変容を図るために，研究開始前後の2回，交流に関する意識調査を行う。
- ・ 各チームは発達段階に応じた具体的な目標と仮設を決め，対象学年・児童生徒を決め，交流を通しての変容を追う。
- ・ 日本コースの一方的な研究授業にならないように，研究授業および研究協議へはメキシココース教職員も参加を依頼し，授業者は，授業前に参観者へ本時の視点「どの点について見てほしいか」をあらかじめ知らせるようにした。

#### (5) 研究の仮説

意図的・計画的な交流を行うことで，児童生徒が互いにコミュニケーションをはかり，目の前の学習課題を解決するであろう。

### 3. 低学年チームの実践

#### (1) 低学年チームにおける研究の経緯

2012年度の研究では，道徳の交流授業を行い，互いに学び合いながら国際性を育んでいくことを目指した。そこで，低学年チームでは，道徳（思考）と共に活動する学級活動（実践）をスパイラルに取り入れ，道徳性と国際性の向上を目指した。

成果として「スペイン語を話せるようになりたい」「メキシコのことを知りたい」「日本のことを教えたい」などといった自発的な気持ち，つまり「自分から関わっていこうとする態度」を向上させることができた。

しかし，それは交流授業の機会を設け，目的や手段を明確にした中でのことで，実際の日常生活の中では関わっていこうという意識が薄く，あいさつを交わすなどの行動が伴っていないという実態も見えてきた。

このことから，2013年度研究主題『国際社会をたくましく生きる力の育成～子どもたち同士の継続的な関わりを大切にしたい学習展開を通して～』を受けて，低学年チームでは，子どもたちが実際の日常生活の中でも継続的に関わるためには，テーマを持って意図的な交流授業を設定することが必要であると考えた。

そこで，継続的に交流授業を行うことで，児童が互いにコミュニケーションを図れるようにした。そして，日常生活においても積極的に関わっていこうとする態度の向上を目指した。

#### (2) 児童の実態

日本コースの児童は，両親が共に日本人であれば日本語を母語として生活し，両親のどちらかがメキシコ人であれば日本語とスペイン語の両方を使っている。多くは日本語を母語としている。

低学年の児童の生活実態からすると日本の文化や日本の習慣の中で生活し，メキシコ文化やスペイン語に触れる経験は少ないと言える。

また，メキシココースの児童とは運動会や死者の日の交流で関わる機会はいまだにあつたものの，運動やゲーム，軽食を共にするにとどまり，子どもたちが相互に主体的に関わる経験はほとんどなかった。そのため，メキシココースと交流するということのイメージをもてない児童がほとんどである。

#### (3) 意識調査

本授業を行うためにメキシココースの児童に，意識調査を行うと「もっと日本のことが知りたい」に「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた児童が74%いたことから日本への興味を示している児童が多数いることがわかる。

一方で、日本コースにおいて「メキシココース、メキシコのことを知りたい」と答えた児童が45%と半数を下回った。「メキシココースの人と一緒に活動したい」と答えた児童も約半数（53%）にとどまった。児童が生活する上で、メキシコ社会やメキシココースの子どもたちと関わる必要性をさほど感じていないという実態が分かる。普段の学校生活が日本コース内で完結していることや日々の生活が日本人コミュニティ内で完結していることがその要因の一つと推測される。また、交流の体験が少ないことから、これらの値が低くなったとも考えられる。

「メキシココースの人に自分の思いを伝えられる」に「あてはまらない」と答えた児童が63%に上った。その一方で、「メキシココースの人に日本について教えたい」に「あてはまる」と答えた児童が65%いた。日本のことを伝えたいが、自信やその経験がないことからメキシココースとの関わりに消極的な姿勢がうかがえる。

#### (4) 目標にせまるための手立て

- ・テーマを持って物作りや遊びなど体験的な活動を設定すること。
- ・活動内容はできるだけわかりやすくシンプルなものにすること。
- ・通訳可能な児童を配置したグループを設定し、グループ活動を取り入れること。

### 4. 実践授業

#### (1) ゴール型ゲーム サッカー【体育科 内容項目E-(1) ア ゴール型ゲーム】の実践

最初の交流授業だったので、交流しやすい体を動かす活動（サッカー）を取り入れた。サッカーの基本的な動きを理解し、少人数のゲームをすることができることを目標とし、1対1、もしくは2対1のペアをつくり、練習とゲームを行った。

授業の途中で「もっとパスをつなぐためにはどうすればいいか。」と発問すると、日本コースから「声を出す。名前を呼ぶ。」という意見を出した後、メキシココースの児童に伝えると「パスをもらう時に声を出すととってもいい。」という意見の交流があった。



混合チームでサッカーゲーム

感想では、「最初話するとき、ドキドキしたけど、自分がやっていることをメキシココースが真似をしてくれました。」「メキシココースはスペイン語が話せなくても、行動だけで動いてくれました。」「サッカーでシュートを決めたとき、メキシココースと喜ぶと、とてもうれしかったです。また一緒に遊びたいです。」などと、活動に対して緊張感がうかがえたものの、1対1でもペア交流で互いに名前と顔がわかり、チームの得点に喜ぶことができていた。しかし、サッカーは取り組めるが、十分にメキシココースと話すことはできず、関わりは少なかった。

次回に向け、交流で使う簡単なスペイン語を事前に確認。1対1の交流だけでなくグループ交流にも取り組むことで、積極的にコミュニケーションをはかる場面を設定した。

#### (2) 日本の文化を紹介しよう【総合的な学習】の実践

メキシココースの児童に日本の遊び（割りばしでっぼう、おりがみ、ビー玉遊び、ビュンビュンゴマ）を紹介し、児童が日本の文化に興味を持つことを目標にした。前回授業からの工夫（改善）点として、グループごとに時間を決めて交流するようにし、交流で使う簡単なスペイン語を確認させた。

授業の途中で「もっと交流をより良くするにはどうすればいいか。」と発問を入れた。日本コースから「積極的にスペイン語を話す。」「身振り手振りで伝える。」メキシココースの児童に伝えると「私たちも日本語を使う。」という意見の交流があり、互いに言葉の壁を越えようという意識が高まった。

感想では、「メキシココースは日本の遊びを知らないのに、わかってやってくれてうれしかったです。」「今度、メキシココースと会ったらグラッシャスと言います。」「メキシココースはちゃんと私たちのことをわかってくれて、うれしかったです。もっともっといっぱい交流して、楽しい思い出を作りたいです。」と、スペイン語を使って説明することができたことや、メキシココースの児童が喜んでくれたことで、充実感を覚えることができていた。



「もっと交流をより良くするには？」

## 5. 実践を振り返って

研究では低学年の児童の実態から、1対1のペアによる交流が有効であることが分かった。さらに効率的な交流を生むためには日本コース・メキシココースの児童のどちらかに学習上のアドバンテージがあることが必要である。

日本コースの教員が主体となって、日本コースのカリキュラムにのっとって交流を行う際には、日本コースの児童に学習上の優位があることが望ましい。低学年の段階から生活科や総合的な学習の時間を通して、体験的にそして十分に日本の文化や風習、遊びに触れさせることで、日本文化を知っているという優位と誇りを子どもたちに形成することができる。その優位と誇りが、自国の文化や学んできた事柄を相手に伝えたいという意欲につながると考えられる。

しかしながら高学年、さらには中学部への移行を考えると複数人同士での活動、グループでの活動も経験させたい。今年度は小学部3年生の総合的な学習の時間においてグループによる交流を試みた。その際、交流するグループを明確にすることでグループでの交流も可能であることが分かった。このように児童の発達段階に応じ、ペアによる交流から徐々にグループによる交流へと移行していくことも、低学年での実践において大切なことである。

また主体的な交流を生むためには、活動において児童の思考・判断を伴う必要がある。限られた交流の機会を有意義なものにするためにも、授業の中盤において指導を行うことが有効であることが分かった。授業の途中で、望ましい関わり方をしている児童、積極的に関わりをもとようとしている児童を称賛し、全体に示すことで子どもたちは交流の「モデル」をイメージすることができる。また児童なりの工夫、考え、感想を発表させ、適切に評価することで、その後の学習をめあての達成に近づけることができる。

## 6. おわりに

「交流授業」と聞くと、日本人学校の児童と現地校の児童が一緒に授業をする、といった姿しか想像できなかったが、一緒に活動するためには、普段の授業では考えない工夫や手だてが必要になってくることがわかり、大変勉強になった。

本実践を進めるにあたり、日本メキシコ学院メキシココースの児童、先生方、日本語教育学部の先生方、なにより日本コースの職員皆様の協力に感謝申し上げたい。

世界でも珍しい国際校「日本メキシコ学院」の更なる発展を願い、本報告のまとめとしたい。

## 参考文献

2013年度 日本メキシコ学院 日本コース 研究紀要 「国際社会をたくましく生きる力の育成 ～子どもたち同士の継続的な関わりを大切に学習展開を通して」